

## 道中ふたり

私が幼いころ育った町は、とても小さかった。

小学生も高学年なら、町をひとめぐりすることはわけもなかったに違いない。

四つの年に引越してしまったから、私はその町のことをほとんど知らない。

憶えているのは、祖母とふたりで歩いた道だ。

祖母は私の家にやってくると、いつも私の手を引いて関所跡と神社に向かった。

Ｔ字路の突当りに神社はあった。

道路から竹林の奥を見ると、手前の大きな鳥居から始まって、いくつもの鳥居が奥に連なって見えた。

神社の赤い鳥居はいつ見てもつややかで、うっそうと生い茂った竹林の中であって、はっとするくらいきれいだった。

かぐや姫の着物は紅色だったと信じ込んだのは、あの鳥居のせいだろう。

拝殿で拝むと、次は関所跡に向かう。

関所跡と言っても、石碑が建っているだけだ。

何も残ってはおらず、遊び道具のない小さな公園のようなどころだった。

神社を出ると、祖母は饒舌になる。

拜んだせいだろうか。

関所跡までの行きすがら、祖母は私にはむつかしいことを熱心に教えてくれる。

「昔はね、関所を越えるのは大変なことだったんだよ」と言われても、私にわかるはずがない。

関所自体がわかっていないのだから、無理な話だ。ここにもあそこにも小さな道があるのに通れないことが、私は不思議だった。

ただ、「おねしょ」に語感が近い「せきしょ」という言葉は頭に残った。

「入り鉄砲に出女」などは、祖母が何を話しているのかさえ、さっぱりわからなかった。

勇ましい語感だけをうつすら憶えていた。

中学生になり、社会の時間にこの言葉を聞き、なるほどと初めて理解した。

あの頃、祖母はいったい何を孫に話したかったのだろう。

「あんたがいくつになるまで、あたしは生きられるのかね」と祖母は口癖のように言うのだった。

あれから六十年が過ぎ、祖母の年に近くなると、ふと気づくことがある。

祖母は夫を亡くし、年の離れた弟までも亡くしたばかりだったのだ。

立派な大人のように見えた祖母も、身近になりつつある死を、まだ受け止めきれなかったのだろう。

「慣れていかなくちや、ね」と独り言をつぶやく祖母の姿は、過去の思い出なのか、自分が勝手に作った映像なのか、定かではない。

年寄りと幼い子どもの二人連れは、歩みも遅い。

どちらが面倒を見ているのだろう。

ふたりで、関所跡の敷地にある桜や梅の花が咲いていけばそれを眺め、木々が紅葉していれば落ち葉を拾った。

散歩に出るのは午後だから、学校帰りの小学生が通り過ぎることもあった。

「こんにちは」と声をかける子どももいた。

祖母も律儀に挨拶を交わし、私は小学生に手を振った。

「いくつ？」と聞いてくれる子もいた。

鬼ごっこをしてくれることもあり、私は関所に小学生が来るのが待ち遠しかった。

散歩とはいうものの、母親に叱られている私を救い出すために家を出ることもあった。

私は幼いころから、頑固な一面があった。

周りが何を言おうが、自分が気に入らないと受け付けない。

母親が出してくれた服が気に入らなければ、着ようとはしない。

朝からそんないさかいが起こる。

母は譲歩しているが、心のどこかで苛立っている。

他のことでまた私が頑固になると、結局、母の怒りは爆発する。

「どうしてこんなにやりづらい子なんだろう」

母はため息をついて私を見た。

三人の子どもを育ててきた母は、それなりに育児に自信もあったことだろう。

それなのに、四番目の私のせいで、母は初心者に戻ったかのようにだった。

私のせいでいらいらしているときに祖母が訪ねてくると、母はとても喜んだ。

私を祖母に押し付けて、いそいそと家事にいそしむ。

祖母は母の愚痴を聞き、それでも娘に「子どもの前でそんなことは口にするものではないよ」と釘を刺した。

「大変だったね」と祖母から慰められた母はどうにか機嫌が戻り、「ほんとな、まったく私も大人げないわよね」と反省する。

知らん顔をしながらも、私はちゃんと二人の会話を聞いていた。

「それじゃ、あそこまで行くとしますか」

そんな口調で、祖母が私からみのいざこざを切り

上げてくれるのがありがたかった。

道すがらの、祖母のおつかしい話を私が一応は聞いていたのは、そんな事情もあった。

「あぶれもの道中としますかね」

祖母が口にする言葉を、その時私が理解していたら、さぞかし面白かったことだろう。

あのころ分からなかった言葉が、長い年月を経て、あぶり出しの文字のように、本当の意味が浮き上がってくる。